

『琉球官話集』の反切

— 北方官話としての一側面 —

渡 邊 ゆきこ

要 約

『琉球官話集』は、質・量ともに琉球王朝時代の官話教材としては、高い研究価値を有し、全四千余項目、ほぼ千箇所にも上る音注は、当時の官話を知る上で、重要な資料となっている。本稿では、天理大学付属図書館所蔵の『琉球官話集』をもとに、『宮良當荘全集』第十巻に付された同書の写真を参考にしながら、同書の反切を中心に分析を行い、同書の音注の一部が明らかに明末清初に書かれた『五方元音』の影響を受けたものであり、北方官話の音韻体系に属することを論証したものである。

キーワード：『琉球官話集』、音注、反切、『五方元音』、北方官話

1. はじめに

『琉球官話集』は、琉球王国時代「官話」と称された中国語の教材である。喜舎場 1981 によれば、近世最末期から明治の初頭頃にかけて、那覇の住人鄭干英が、当時流布していた数冊の書籍を合本し、現在のような形にした。^①

現在天理大学付属図書館に所蔵されている『琉球官話集』の見出し語句は、4124 項目。そのほとんどに中国語の音声に関する記載と琉球語による意味が付されている。中国語の語彙の多さ、音韻に関する表記の豊富さは、他の琉球王朝時代に記された中国語関連の書籍の中でも比類を見ない。本書が当時、琉球で学ばれ、あるいは話されていた中国語を知る意味で、最も貴重な資料であることは、言を俟たないだろう。

では、それはどのような中国語だったのだろうか。

平 1981 は、長崎や薩摩の通事が残した資料に、全く「官話」という文字が使用されていないことに着目し、次のように述べている。

琉球では純粋な北京官話ではなく、それに近い北方官話、あるいは福建官話であったのに対し、長崎、薩摩では江南語を使用していたのである。^②

江戸幕府による鎖国体制の中で、民間レベルで

の通商活動を主に中国と交流を持っていた長崎が、当時最大の貿易港をもつ江南地方の言語をそのコミュニケーションの手段としていたことは、想像に難くない。また、現在の研究では、長崎には多くの福建系の中国人が居住していたことも分かっており、福建の方言を話していた可能性も高い。

これに対し、薩摩は事実上、琉球を中継点として、清国朝廷と貿易を行っており、中国語に関する情報も、琉球からもたらされた可能性が高い。琉球の使者や官費の留学生の中には、自ら北京を訪れ、あるいは数年におよぶ滞在経験を持つ者も、多数いたと考えられる。矢放 1981 によれば、薩摩は各地に中国語の通訳官を置き、中国語の教科書として『二字話』『三字話』などを刊行していたが、^③この二冊に関しては、『琉球官話集』にも同名のものが収められており、教材に関しても、琉球と薩摩に交流があったことを物語っている。言い換えれば、薩摩と琉球の通事が使用していた中国語が、ある程度共通していた可能性も高い。

琉球は、清朝政府と直接政治的・経済的交流関係をもっていた。平 1981 は、「琉球の中国語が福建官話より、さらに北方官話、あるいは北京官話を意識していたことは十分に予想される」^④ともしている。「官話」という名称を使っていること

自体からも、ある程度共通語を学ぶという認識を持って教科書が編纂され、あるいは学習がされていたことは想像に難くない。

では、それは福建官話だったのだろうか、それとも北京官話だったのだろうか。

本稿では、天理大学付属図書館に所蔵されている『琉球官話集』と『宮良當壯全集』第十巻に付された同書の写真⁶⁾の音注、特に反切を中心に分析を行い、本書が編纂された近世末期の前後、琉球で教授され、学習されていた中国語が、福建官話だったのか北方官話だったのかを考えていきたい。

2. 『琉球官話集』の音注

『琉球官話集』は、文字が記載されている頁だけで130頁。頭注を除く項目数は4124に上るもので、これは今日伝存する琉球王朝時代の官話教本の中で、最大規模のものである。

内容は、「呼称類」「内外親族称呼類」「向人回答類」「人物死後称呼之言」「応答人物死後之類」「身体之類」「食物之類」「二字官話」「三字官話」「四字官話」「五字官話」「北京俗語」「琉球国三十六島」「唐榮八景」「本国俗並漢字呼」「冠船冊封座々廻々名記」と多彩だが、この内、中国語の単語や短文が記載されているのは、「北京俗語」までであり、それ以降の部分は、他の史書を引き写したのではないかと考えられる。

2. 1 音注の種類

本書の音注には、合本された個々の書籍が、本来出版された段階で、すでに付けられていたものと、後に本書の所有者達が書き加えていったものがあると思われるが、少なくとも、全篇にわたりすべての漢字に付けられた朱点の声調表記は、著者が付したものだと考えていいだろう。

本書には前書きも凡例もないが、左下にある「。」が陰平、左下にある「、」が陽平、左上にある「、」が上声、右上にある「、」が去声、右下にある「、」が入声を表していることが見て取れる。

この声調表記以外の音注は、すべて後に書き加えられたと考えるのが妥当である。

本書の音韻表記には、以下のようなものがある。

●墨で書かれたもの

- 「～～切」と記載された反切
- 「音～」と記載された伝統的な直音に類するもの
- 「二音～」と表記されているもの
- 漢字の右側、時には左側や下に書き加えられた音注と思われる漢字の表記
- 「ゾワン」「ヤン」などカタカナによる音注
- 「上平」「下平」「上声」「去声」「入声」という文字による声調表記

●朱で書かれたもの

- カタカナで「キ」と書かれたもの
- 文字や意味記載の間違いをただしたと思われる、塗りつぶしと文字

注記は、一字に一種とは限らず、これらを組み合わせたものも多い。

他には、「喉」「ノド」「牙」「舌」「唇音」など、調音点を表記したと思われるものもあり、墨で書かれていたり、朱で書かれていたりしている。

2. 2 「尖団之別」

カタカナの「キ」は、注記された文字は、全部で85か所に出現する。「キ」と付記されている文字は、以下のとおりである（頁数は、宮良本の写真に付けられたもの）。ちなみに、「キ」は頭注には出現しない。

- p 20:「揀」「吉」「限」「下」「舊」「氣」「下」
- p 21:「今」「吉」
- p 22:「喜」「興」「戲」「寄」「見」
- p 23:「舊」「欠」「敬」
- p 24:「拋」「拋」「記」「仮」「結」「交」
- p 25:「家」「倦」「軀」「健」「計」
- p 26:「計」「計」「撿」「氣」「家」「去」「強」
「今」
- p 27:「欠」「缺」「緊」「強」「舊」「撒」
- p 28:「行」「几」「駕」「行」「求」「筈」
- p 29:「掲」「仮」「講」「腔」「起」
- p 30:「仇」「暁」
- p 31:「家」
- p 32:「稀」「結」
- p 34:「响」「家」
- p 35:「輕」「香」「仮」「巧」
- p 38:「姦」

- p 39: 「勤」「慳」
- p 40: 「閑」「九」「謙」
- p 41: 「急」
- p 43: 「佳」「喜」
- p 44: 「蒼」「吃」
- p 47: 「拳」
- p 72: 「兇」「救」
- p 73: 「講」
- p 76: 「向」「巧」

これらは、p 28「筈」とp 44「蒼」を除き、すべて中古音体韻系では「見」「溪」「群」「曉」「匣」など一連の声母を持つ文字である。

藤堂 1959 が指摘するように、中古音には存在していた「見」「溪」「群」「曉」「匣」と「精」「清」「從」「心」「邪」の区別は、18世紀、あるいはそれ以前から北京官話では混同され始め、現在の普通話では共に [tɕ] [tɕʰ] [ɕ] と発音されている。^④ 当時前者は「団音」、後者は「尖音」と呼ばれていた。『琉球官話集』の「キ」という表示は、正に「団音」を指しているとみて間違いない。つまり、『琉球官話集』の官話は、「尖団之別」を持つため、少なくとも北京官話ではないと言える。

3. 反切から見た『琉球官話集』の中国語

3. 1 『琉球官話集』の反切

『琉球官話集』に記載されている反切は、計60か所。その内容は表1の通りである。

『琉球官話集』で使用されている反切は、その使用された文字から、以下の二群に分類できる。

ここでは、次の11項目を第一群とする。

- p 12 「鱧：居勞切」
- p 24 「越：雨月切」
- p 26 「番：孚艱切」
- p 27 「缺：去月切」
- p 28 「拈：戰珍切」
- p 28 「拈：尼占切」
- p 30 「靛：川略切」
- p 32 「搭：他甲切」
- p 41 「雪：徐結切」
- p 109 「撐：丑鄒切」
- p 109 「撐：抽剛切」

表1 「琉球官話集」の反切一覧

頁	反切鼎字	反切	その他の記載内容
9		肋 雷蛇切	
12	*	鱧 居勞切	字典…音羔
21		爽 石羊切	…音霜雙
21		冷 雷龍切	
23		債 竹才切	…擇澤齋
23		借 剪蛇切	…節截接楫捷姐
23	*	懷 火方切	
24	*	越 雨月切	…員入聲
26		進 剪人切	
26		准 竹人切	
26		特 斗地切	
26	*	番 孚艱切	…音翻
27		守 石牛切	
27		缺 去月切	
27		燒 石鑿切	
27		擾 日鑿切	
28	*	拈 戰珍切	…音?
28	*	拈 尼占切	…又…音黏
29	*	錯 虎鶴切	…去聲
29	*	錯 鵲駝切	
30		畫 火馬切	…化話
30		臘 剪天切	…暫上聲
30		靛 川略切	
31		湊 鵲鑿切	
31		剪 焦 剪鑿切	
31		便 匏鑿切	
32		搭 他甲切	…塔邊
33		陪 匏地切	
33	*	賺 剪天切	…去聲
33	*	賺 竹天切	…去聲
34		恥 虫世切	
34		閃 世天切	…善上聲
37	*	瘦 石牛切	…瘦去聲
40	*	扎 竹馬切	…音乍入聲
40	*	撞 竹羊切	…音莊裝狀
41	*	劈 匏世切	…僻僻 辟匹
41	*	雪 徐結切	…音血學
41	*	養 系駝切	／梭婆鎖
41	*	阿 火駝切	／阿娥鵲哦我餓惡
41	*	呵 火駝切	／何合賀
42	*	呵 火駝切	／何合賀
43	*	蘇 系虎切	／音俗訴宿粟速肅
44	*	摺 竹蛇切	／音折浙者遮這炙
44	*	邊 斗馬切	／音邊
53	*	鰕 火馬切	…音下
53	*	樵 鵲鑿切	…音樵醜
53	*	片 天匏切	…去聲音便
56	*	樵 鵲鑿切	…音樵醜
63	*	蝦 火馬切	①…音下
81	*	桌 竹角切	
82	*	吞 土人切	…豚同屯亦同
84	*	牽 橋天切	…音謙
84	*	雕 斗鑿切	…音刁貂弔鈞
86	*	墜 竹地切	…去聲追綴贅錐
86	*	賊 剪地切	…音則子自字入聲
86	*	噴 匏人切	…盆去聲
86	*	宿 系虎切	
93	*	齋 竹才切	…債上平
109	*	撐 丑鄒切	…去聲／
109	*	撐 抽剛切	…悵平聲

凡例：* 頭注

…反切に続けて書かれたもの
／行を変えて書かれたもの

これらは、反切上字から、更に二種に分けられる。つまり、『廣韻』で使用されている反切上字を使用しているものと使用していないものの二種であり、前者には、p 12「鱸：居勞切」、p 24「越：雨月切」、p 26「番：孚艱切」、p 27「缺：去月切」、p 28「拈：尼占切」、p 32「搭：他甲切」、p 41「雪：徐結切」の7項目が、後者には、p 28「拈：戰珍切」、p 30「齷：川略切」、p 109「樛：丑鄧切」、p 109「樛：抽剛切」の4項目がある。

『琉球官話集』に入声があることは、すでに述べたが、この反切でも入声の反切帰字には、例外なく入声の反切下字があてられている。音注を書き入れた人物が、正確に入声を認識できた事を反映していると思われる。この点から見ても、本書に記されている中国語が、入声を持たない北京官話以外のものであることは、明らかである。

一方、第二群は、上記の反切以外のすべてだが、これらは『廣韻』で使用されている反切上字を使用していないばかりか、反切上字、反切下字ともに種類が少なく、しかも規則性を持っているように見受けられることが特徴となっている。

3. 2 規則性のある第二群の反切上字と反切下字

ここで特に、前項で分類した第二群、つまり比較的単純で規則性のある独特な反切を見てみたい。

反切に使用されている文字は、以下の通りである。

反切上字：火、雷、橋、系、虎、世、石、竹、虫、天、斗、土、剪、匏、鵠、日
反切下字：駝、蛇、馬、虎、鵠、天、牛、羊、角、才、匏、癸、人、龍、地

p 29「錯：虎鵠」とp 53「片：天匏」が原因で、これら4文字が反切の上字にも下字にもなっている以外は、共通して使用されている文字はない。これを従来とは逆の順序、つまり「韻+声母」の順で表記していると解釈すると、『琉球官話集』の反切は、以下のように声母と韻それぞれ専用の文字を使用していると解釈することができる。

反切上字：火、雷、橋、系、世、石、竹、虫、斗、土、剪、匏、鵠、日
反切下字：駝、蛇、馬、虎、天、牛、羊、角、

才、癸、人、龍、地

3. 3 『五方元音』との関係

ここで注目されるのが、『琉球官話集』の注記の中にひんばんに出現する『五方元音』である。

『琉球官話集』には、以下のように、数冊の書籍が引用されている(②は1頁に2回引用されていることを表す)。

『五方元音』：p 21、p 23、p 26、p 28、p 38、p 41、p 42、p 43、p 48②、p 49、p 51、p 52、p 59、p 62②、p 64、p 66、p 68、p 104、p 106、p 110、p 111

『康熙字典』：p 27②、p 28、p 31、p 42、p 52^㉑、p 86、p 104、p 110

『玉篇』：p 30②、p 52、p 73、p 101

『説文解字』：p 28

『總譯亜細亜言語』：p 124

『總譯亜細亜言語』が中国語の教材であるのを除けば、いずれも辞書の性質を持つものだが、『五方元音』の引用回数の多さが、特に目を引く。

『五方元音』と反切を直接関連させて引用しているのは、p 73の頭注にある「五方元音音丁北京音相」という記載だけで、ほとんどが次のような引用の仕方である。

p 21：乗、五方元音勝声

p 43：給、五方元音音吉入声

p 48：膝、地系入声音夕見于五方元音

多くは、頭注に出現し、見出し語につけられた音注を補足あるいは訂正する意味で使用されている。上の例も、p 21は見出し語の「乗涼」に朱点による声調表記しかないため、頭注で補ったものである。p 43は見出し語の「給你」の「給」に「二音集」と音注がされているが、これを『五方元音』を根拠に訂正したもの。p 48は見出し語「両膝」の「膝」に「発」とも読める音注を訂正したものと思われる。つまり、少なくとも頭注を書き加えた人物の一人は、『五方元音』に記載されている字音の方が正しく、そう発音すべきだと考えていたと見ることができるだろう。

また、p 73の「五方元音音丁北京音相」という記載からも分かるように、『五方元音』の音韻

表2 『琉球官話集』と『五方元音』の用字比較表

『琉球官話集』の反切上字	×	匏	×	×	斗	土	×	雷	竹	虫	石	鵲	系	×	×	橋	火	×	世
『五方元音』の声母	梯	匏	木	風	斗	土	鳥	雷	竹	虫	石	鵲	系	雲	金	橋	火	蛙	×
『琉球官話集』の反切下字	天	人	龍	羊	牛	癸	虎	駝	蛇	馬	豺								
『五方元音』の韻	天	人	龍	羊	牛	癸	虎	駝	蛇	馬	豺								

体系が、「北京音」そのものではない、という認識があった事も見て取れる。

『五方元音』は、清の樊騰鳳（1601～1664）が、順治11年（1654）から康熙12年（1673）に著した韻書であり、民国初期まで中国北方で盛んに使用された。『廣寧年希堯增補本』が最も広く流通したが、康熙49年（1710）、雍正5年（1727）、同治元年（1862）、光緒16年（1890）、民国2年（1913）など多くの刊本があり、諸版は文字の増補だけでなく、音韻体系にかかわる内容の改変まで行われており、テキストは多い。⁸⁸

しかし、藤堂1957によれば、いずれの版本も、古官話の性格を脱し、近代官話としての音系体系を体現している。⁸⁹ また『中国語新辞典』p 187～p 188は、今日の北京語の音系が成立する過程の第一段階として『五方元音』の音韻体系を挙げ、韻母体系に関しては、すでに「涯」[iai]の存在が現在の北京語とは異なる外は、現代北京語とまったく同じだともしている。つまり、『五方元音』の音韻体系は、北京官話そのものではないとしても、それに大変近い北方官話の音韻体系だと言えるのである。

実は、この『五方元音』の声母と韻は、『琉球官話集』の反切で使われている文字に酷似している。

『五方元音』の声母と韻は、以下のとおりである。

声母：梯、匏、木、風、斗、土、鳥、雷、竹、虫、石、日、剪、鵲、系、雲、金、橋、火、蛙

韻：天、人、龍、羊、牛、癸、虎、駝、蛇、馬、豺、地

両書の用字を比較してみると(表2を参照)、『琉球官話集』では、韻に『五方元音』では使われていない「世」「角」の二文字が使われている。また、『琉球官話集』の「才」は『五方元音』の「豺」に相当すると思われる。しかし、これらの

ずれは、いずれも版本の違いや新たな音韻現象を反映している可能性もあり、その食い違いの理由を簡単に断言はできない。しかしいずれにせよ、これだけ用字が一致している点から見ても、『琉球官話集』に注を書き加えた人物が、『五方元音』の影響を強く受けているとは言えるだろう。

『五方元音』の影響を受けていると思われるのは、反切用字ばかりではない。声調の表記法にも、『五方元音』の特徴が現われている。

上述したように、『琉球官話集』に墨で書き加えられた声調は、「上平」「下平」「上声」「去声」「入声」と記されている。

- 例) p 26 「強：音腔羌下平」
- p 29 「掀：韻上平」
- p 32 「陰：音從上平」
- p 42 「盛：下平音成」

この「陰平」「陽平」に相当する「上平」「下平」という名称は、『五方元音』あるいはその系統を引く韻書独特のもので、他で使われることはきわめて少ない。⁹⁰

また他に、傍証となるが、『五方元音』にも「尖団之別」があり、これも『琉球官話集』の音韻体系と一致する。ちなみに、『五方元音』では、団音は「金」[k]「橋」[k']、尖音は「剪」[ts]「鵲」[ts']で表記されている。⁹¹

以上から、『琉球官話集』に注を書き込んだ人物には、『五方元音』の音韻体系、言い換えれば明末から清初にかけて成立した、北京官話に大変近似する北方官話を学習していた人物がいたと、断言できるだろう。

もちろん、以上述べた反切は、前述したように、『琉球官話集』の反切の中でも、第二群に属するもので、すべてではない。ただ、数量的にみても、また他の音注に使われている用字から見ても、この第二群がある程度主流となっていると思われる。しかし、第一群が反映している音韻体系に関

する研究も、当時琉球で学習されていた中国語の全貌を知る上で、重要なポイントであり、今後の研究課題としていきたい。

4. おわりに

以上みてきた音注は、前述したように、『琉球官話集』に記されている音注のほんの一部に過ぎない。量的に最も多いのは「音～」と書かれる直音に類する表記である。「二音～」や直接一つから数個の漢字をただ列記したものも少なくない。今後、これらの音注を分析し、『琉球官話集』が反映する官話が正しく北方官話なのか、音韻ばかりでなく、語彙、文法などの面からも、研究を進めていきたいと考えている。

最後に、反切の分析から得られたいくつかの収穫について述べておきたい。実は、『琉球官話集』の音注には、現在のところ、意味不明なものも少なくない。「二音」は、その意味自体不明だが、特に直接書き加えられた漢字の羅列には、首をかしげるものが少なくなかった。今回反切を分析するうちに『五方元音』の音韻体系を音注に取り入れていることが分かったことは、解読のうえで大きな前進となった。また、『琉球官話集』の反切表記に、従来とは逆順のものがあることが分かったことも、ささやかながら今回の収穫の一つだったと考える。

注

- (1) 喜舎場一隆 1981『宮良當壯全集』第十巻・解題、p 659、第一書房。
- (2) 平和彦 1981「近世琉球の官話」、『宮良當壯全集月報』7、p 2、第一書房。
- (3) 矢放昭文 1981「『南山俗語考』初探」、『鹿児島経済大学論集』、第23巻第1号 p 72。
- (4) 平和彦 1981「近世琉球の官話」、『宮良當壯全集月報』7、p 3、第一書房
- (5) 1999年7月28、29日、沖縄国際大学の高橋俊三教授と兼本敏助教授、筆者の3人で天理大学付属図書館を訪れ、朱点などの確認を行ったが、p 47までしか確認できなかったため、今回それ以降の部分については、宮良本に付された写真を拡大して確認した。
- (6) 藤堂明保 1959「ki- と tsi- の混同は18世紀に始まる」、『中国語学』95号、p 1～3、p 12。
- (7) 頭注には、ただ「字典」としかないが「康熙字典」と判断した。
- (8) 中国語学研究会編 1987『中国語学新辞典』第7刷、光生館、p 212～214。
- (9) 藤堂明保著 1957『中国語音韻論』、江南書院、p 104。
- (10) 永島栄一郎 1941「近世中国語特に北方語系統における音韻史研究資料について」『言語研究』7号、p 146～161と同氏 1941「近世中国語特に北方語系統における音韻史研究資料について(続)」『言語研究』9号、p 17～79を参照。明初から民国にかけて書かれた韻書40冊を詳細に紹介している。
- (11) 中国語学研究会編 1987『中国語学新辞典』第7刷、光生館、p 188。

参考文献

- 鄭干英編『琉球官話集』、天理大学付属図書館蔵
 宮良當壯著 1981『宮良當壯全集』第十巻、第一書房
 藤堂明保 1957『中国語音韻論』、江南書院
 董同龢 1989『漢語音韻学』、文史哲出版社
 陳彭年等重修 1987『新校正切宋本廣韻』、黎明文
 化事業公司
 中国語学研究会編 1987『中国語学新辞典』、光生館

An Analysis of 'Fanqie' Used in Ryukuan Chinese (Mandarin) Textbooks, "Riuqiu-guanhuaaji"

Yukiko Watanabe

Abstract

"Riuqiu-guanhuaaji" are old Mandarin Textbooks used during the period of the Ryukyu Kingdom (1429-1879) which has 130 pages with more than 4000 topics and 1000 vocal sounds. It is preserved at the library of Tenri University in Nara. This paper will analyze the 'fanqie' used in "Riuqiu-guanhuaaji" compared with the sound symbols used in the Collection of Chinese Language by Toso Miyahara. The study reveals that the sound symbols used in the Ryukuan Mandarin textbooks have been greatly influenced by the "Wufang-yuanyin" written at the end of the Ming period (1368-1644) or the beginning of the Shin period (1644-1912). This proves that Northern Mandarin dialects are widely used in the textbooks.

Key words: Riuqiu-guanhuaaji, sound symbols, fanqie, Wufang-yuanyin, Northern Mandarin dialects

《琉球官話集》之反切

—反映北方官話的一個層面—

要 約

《琉球官話集》是在琉球王朝時代通行於琉球的中文教材，無論從其質量或規模以觀，其研究價值之高是無庸置疑的。本文係針對天理大學附屬圖書館所收藏的《琉球官話集》，並參照《宮良當莊全集》第十卷附錄於本書照片，對其「反切」進行分析，藉以證明《琉球官話集》中之部分注音記載確係明顯地受到《五方元音》的影響，更能進而證明《琉球官話集》的部分內容反映「北方官話」之音韻體系。

關鍵詞：《琉球官話集》、注音、反切、《五方元音》、北方官話